浜田市議会議長　原 田　義 則　様

議員名　江 角　敏 和

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

１．期　　間　　平成２６年１１月１１日（火）～　11 月１３日（木）

２．調査項目　　○サテライトオフィスの誘致について
○野球のまち阿南推進課事業について
○婚活応援係の取組について
○小さな漁村集落「伊座利」の取組について

３．視 察 先　　○神山町農村環境改善センター（徳島県名西郡神山町）
○神山町サテライトオフィス設置箇所の見学
○阿南市役所（徳島県阿南市）
○阿南市役所：野球の町推進課（市役所内）
○ＪＡアグリあなんスタジアムでの試合と応援見学（現地）
○伊座利の未来を考える推進協議会（徳島県海部郡美波町伊座利:漁業協同組合内２階）
○子どもたちの体験漁業（港湾内と漁協建物前）
○イザリ Cafe（漁協建物横）

４．参 加 者　　飛野弘二　平石誠　西田清久　小川稔宏　笹田卓　江角敏和

５．調査経費　　３１，５３６ 円
（詳細は別紙）

６．調査活動の概要と所感
（次ページからへ記）

浜田市議会 受付 27.3.30

○サテライトオフィスの誘致について（神山町）

１１月１１日（火）徳島県の「ほぼ中央」と紹介される、名西郡神山町の「神山町農村環境改善センター」にて、「特定非営利活動法人グリーンバレー」理事長、大南信也さんから、「神山プロジェクト ～創造的過疎から考える地域の未来～」と題するお話を、他の受講者と一緒に伺った。

会場で配布された資料の最終ページに、「里山プロジェクト」という本を紹介した新聞記事が添付されていた。その前段には、「徳島県神山町は移住者が増えて話題を集めている過疎の町である。都会を上回るＩＴ（情報技術）環境などにひかれてサテライトオフィスを構える企業が相次ぎ、『中山間地再生のモデル』として全国から視察者が絶えない。内外の芸術家を招いて暮らしながら芸術作品を創作してもらう活動や職業訓練事業を展開する神山塾の運営、古民家の移住者への提供など、様々な取り組みが神山町を変えた。一連の事業を仕掛けてきたのは地元住民で立ち上げたグリーンバレーというＮＰＯである。…」と、記されていた。その記事で、まず全体像を捉えることができた。

講演は、その資料に添って進んだが、「過疎の町で起こった、２つの異変」として、①つは 2011 年度社会動態人口（1955 年合併後、初の社会増）と、②つは、ＩＴベンチャー企業など１１社 ～ サテライトオフィス設置・本社移転・新会社設立 があった、というお話がされた。これは、2011 年に転出数より転入数が上回ったということであり、それに裏打ちされた、自信あふれるお話や、転入されてきた会場事務所の女性スタッフの明るさ、また実際に町を視察してみても街並みが再生しつつあることを肌で感じとることができた。

決して人口が増えているわけではないものの、転出数と転入数を比較する「社会動態人口」に着目され、それを分析されている点は、生まれた人と亡くなられた人との差である「自然動態人口」も含め、浜田市で事業を考案しそれを進めるにあたって、人口増だけを目指すのではなく、こうした数値を意識し、しかも市民自身がどれだけ自信と誇りをもてるようになったかへ着目すべきではないかと感じた。

大南さんは、大きく３つの項目で話されたが、１つは、創造的過疎とは？として、「現状を受け入れ」、「人口構成の健全化を図り」、「多様な働き方を実現し」、「バランスの取れた持続可能な地域を目指す」と。２つは、過疎地における課題は、雇用がないこと、仕事がないこと、とされ、それが「若者が古里へ帰って来られない」、「移住者を呼び込めない」、「後継人材が育たない」ことを踏まえ、３つ目に神山プロジェクトについて説明された。

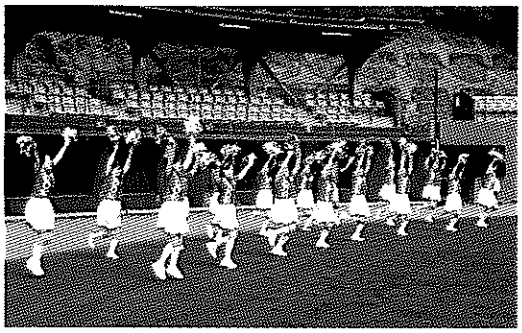
具体的には、①サテライトオフィス（場所を選ばない働き方が可能な企業の誘致）②ワ

ークインレジデンス（仕事を持った移住者の誘致）③神山塾（職業訓練による後継人材の積極的な育成）を取り組んでこられたことが語られた。

環境や歴史の異なる町へ神山町が取り組まれた手法等を、ものまねで当てはめても、まちづくりは進まないだろうが、その中にある真髄や気概を学ぶことこそ重要だと感じた。講演が終わってから、サテライトオフィス設置場所等、現地へ出向き説明を受けた。視察後、浜田市でも旧後野小学校の校舎へ、東京に本社があるソフトウエア開発をしている会社の進出が決まった。１つの結果としては同じであるものの何かが違うという感じがした。

冒頭で神山プロジェクトを紹介した新聞記事に、以下のような言葉で締めくくられていた。「…地元で用品店を構えるグリーンバレーの中心メンバーの１人が『ある意思をもった人間が５人もいれば町は変わる』と断言する…」と。また、大南さんも説明された過疎の「現状を受け入れ」、そこの住民が、「何とかしよう」といった、現状の認識、変えようという気概、そして努力の積み上げが、あるかないかの違いではないかと感じた。まちづくりの中心に住民がいるかいないか、そこが今回の浜田との違いではないかと感じる。

○野球のまち阿南推進課事業について（阿南町）



１１月１２日（水）徳島県の南に位置し、県内２番目の人口を有する阿南市の市役所へ伺った。まず、荒谷みどり議長からの挨拶があり、その中でも触れられ、後に拝見した「ＡＢＯ６０（阿南ベースボールおばちゃん６０歳以上）」という、６０歳以上のチアーリーディング応援団の一員でもあるとのこと。

続いて説明資料に添い、野球のまち推進監の田上重之さんより、「野球のまち阿南推進課事業について」、以下の順で説明を受けた。

１．「野球のまち推進事業」を始めた経緯
２．「野球のまち推進事業」とはどういう事業か
３．「野球のまち推進事業」を実施したことについての効果と評価
４．実績
５．今後の課題

▼ 野球推進課の様子

阿南市内に中高年齢者の野球愛好家が多く、活発な取組をしている他県への視察で、野球を産業として捉え経済振興・観光振興に活かしていることへ着目し、しかも阿南市での宿泊者数が少ない現状から、説明をされた田上重之さん（全日本早起き野球協会の事務局）が、市長へ「野球のまち推進事業」を提案されたとのこと。前日の神山町：大南信也さんと同じく、ここにも意思ある人の存在を感じた。

お話の中で注目したのは、阿南市が果たした役割として、（1）草野球に着目して地域の振興を図った。（2）プロ仕様の本格的野球場を中高年齢の野球愛好家が使用できるようにした（3）野球と名の付いた課を全国初で創設した（4）各級競技団体と連携し事業を運

営、主催は競技団体、市は実行委員会事務局、民間ではできない部分を市が担当、されていることであった。

まさに「行政は仕掛け人」として、事業を仕掛け、その事業のサポート役に徹し、あくまでも主催や主体は、競技団体及びプレイヤーであること、そしてチアーリーディング応援団や宿泊施設などでの多くの市民の協力があることに学ぶことができた。ここでも担当者の方の自信と、応援団・市民の明るさがあった。

その裏付けは、宿泊者数３千人、経済効果１億円、阿南市の主たる事業に発展している、といった、やはり実績がある。もう１つの調査事項を終えて、「ＪＡアグリあなんスタジアム」へ行って、試合や応援を実際に見させていただいた。今年７月には、さらに屋根付き練習場ができるそうだが、学んだような実績・成果を踏まえれば、建設の必要性には説得力があった。それは、まちづくりの方針や担う主体が明確だということでもある。

○婚活応援係の取組について（阿南市）

「野球のまち阿南推進課事業」に続いて、同会場で「婚活応援係の取組について」、婚活応援係の大川康宏係長さんから、お話を伺った。ここでもパワーポイントを使った説明があり、特に基本的な分析は勉強になった。その説明では、「婚活とは？」から始まり、「就職活動」を略した「就活」をもじった造語で、結婚活動のこと。ある教授とジャーナリストの共著「『婚活』時代」からブレイクしたものだ、と…。

次に「本当に今、『婚活』が必要なのか？」では、２０１０年の生涯未婚率は、５０歳時未婚率、男性２０．１％、女性１０．６％との説明が続いた。それから、「市長３期目の公約の１つとして、婚活応援係」が新説されたことが分かった。以降、①市職員にも晩婚化・未婚化への感心をもってもらうため「婚活応援隊」の結成を呼び掛ける　②市内で婚活支援に取り組む団体へ「縁結び」を呼びかけ組織を強化！　③徳島県初！婚活応援大使の任命　④婚活イベントやスキルアップ講座などの開催、の説明では一定の成果があったというお話であった。

しかし、未婚率が増加している要因は何か、そして婚活を応援する目的は何か、行政の役割はどこまでか、政治の役割は、等々を考えると成果も見えにくいし難しい事業だと感じた。説明の後半では、「婚活事業の問題点」として、○実際にカップルが誕生してもプライバシー等の関係から、その後結婚に至ったかどうかまでの把握が難しい。○最近では、テレビで婚活や出会い系イベントの告知はタブーとなっている。○イベント後のトラブル。○言葉の使い方にデリケートになる。○すべての参加者に満足していただくイベントは難しい。…とあったが、婚活事業を推進する難しさについても整理されていた。

同時に、分析の中に「相手に求める年収」として、男性は女性に３０１万円。女性は男性に６８２万円を希望し、最低でも４２７万円と回答するなど、日本のサラリーマン平均年収４１２万円より高い希望をもっている、とのこと。現行の働く人たち、特に若い人た

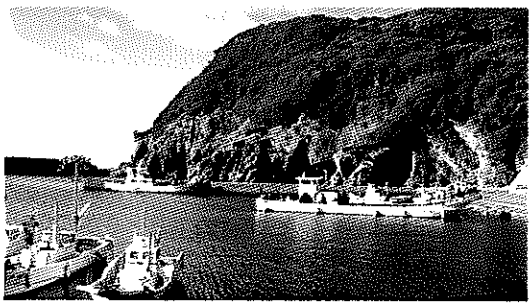
ち総体の年収増や、将来不の解消が実感できないとすれば、例え婚活事業で結ばれたとしても、生活し続けられるのか、という問題が残ることも考えさせられた。

○小さな漁村集落「伊座利」の取組について（伊座利）

１１月１３日（木）徳島県海部郡美波町の伊座利を訪ねた。この住所からも分かるように「伊座利」とは集落名であった。１００名余りが暮らしておられ、美波町では最も小さな漁村集落だそうだ。しかも、その伊座利へ行くには長い峠を越えなければならず、到着した時にはどこか周りから閉ざされた別世界へ来たような感覚だった。

建物の外壁へ「生活改善センター」と記された伊座利漁協の２階で、小さな漁村集落「伊座利」の取組を学ぶため、「漁村留学制度」について、「未来を考える推進協議会」の方と伊座利小学校・由岐中学校伊座利分校の校長先生から、お話を伺った。Ｈ４年に廃校問題が出てから、集落存亡の危機感も高まり、それ以降の取組で、現在も学校が存在していることへの自信すら感じる協議会の方のお話だった。

伊座利校への留学制度は、「親子が一緒であること」を大切な条件にされ、希望者へは地区・学校関係者で面談を行い断ることもあるそうだ。あくまでも子どもは親と暮らすのが一番だと考え、これまで１～２年の短期を含め、首都圏、関西圏、徳島県内など、全国各地から１００人を超える転入生を受け入れられれている。現在も住民の４０％以上が移住者だとの資料もあったし、生徒のほとんどが集落外からの入学生だそうである。



「なにもないけど、なにかある」、「働くところはない、漁師が唯一の仕事、収入を得るまでには覚悟が必要」との紹介でも分かるように、決して移住希望者へこびることなく正直な姿勢である。「仕事は自分で探してもらう、家だけは提供する（家賃あり）」、「住民がやる気を出すことが大切、行政は方向制と知恵を…」と話されたことも印象的であった。当日は、実際に子ども達の「大敷網魚体験」が行われていたが、地域の方達が自然体でサポートされていて、この伊座利にもリーダーの存在と元気な住民の姿があった。

昼食は、海女さんや漁師のおばちゃんたちが運営される「イザリ Cafe」で、とらせてもらった。この視察では、単なる「漁村留学制度」ということでなく、集落を維持していくため、そのものの集落の姿勢を視させていただいたような気がした。

ここで得たものを整理し、そして紹介もしながら２０１５年３月議会の一般質問で、「自治区制度と地方自治」と、「地方自治とまちづくり」を取り上げさせてもらった。

以　上